

# 不明確な不定詞の意味上の主語

小間坂 和 一

## 内容

|   |     |
|---|-----|
| 不明確な不定詞の意味上の主語                            | 163 |
| はじめに                                      | 163 |
| 1. 不定詞の意味上の主語                             | 163 |
| 2. for 名詞 (句)・代名詞と用法                      | 171 |
| 3. 「for + 目的格」不定詞補文                       | 172 |
| 4. It Is + 形容詞 + (for Someone) to Do      | 177 |
| 5. It Is + 形容詞以外のもの + (for Someone) to Do | 180 |
| 終わりに                                      | 183 |

## はじめに

不定詞 (infinitive) は準動詞と呼ばれ、定動詞 (finite verb) が主語の人称・数または時制・法などに呼応して語形変化するのに対して、原則として変わらない。不定詞は補文として主文に埋め込まれ、名詞的・形容詞的・副詞的な働きをしながら、定動詞と同じような意味や機能を持っている。しかしながら、主文の主語・動詞・目的語と、それに埋め込まれた不定詞補文の主語・動詞・目的語が一つの文の中で位置をとどめず複雑に絡み合い、論理的関係が曖昧になって、戸惑い混乱を招くこともある。不定詞補文は主文の構造と基本的には同じであるが、さまざまな相違点がある。

本稿では、不定詞の意味上の主語に焦点を当てて、その性質を名詞 + to 不定詞, for + 名詞 (句), for + 目的格不定詞補文, It is + 形容詞 + (for someone) to do, It is 形容詞 + 名詞 + (for someone) to do のさまざまな構文の中から特徴づけたものである。to 不定詞はシンプルな形でありながら、形容詞, for 名詞 (句) の統語的な組み合わせを複雑に変えることで、自由な幅広い表現力を得ている。しかし、シンプルな形に固執あまり、欠落した部分が多く、不定詞の理解を阻む元凶を作り出している。その問題点に触れることにする。

### 1. 不定詞の意味上の主語

不定詞補文は短いシンプルな形ながら、いろいろな意味を持ち、さまざまな文法上の機能を果たしている。不定詞の意味上の主語は全部で5つ。

#### 1) 主文の主語

- 2) 主文の他動詞の目的語
- 3) for 名詞 (句) あるいは of 名詞 (句)
- 4) 文脈から判断される人
- 5) 漠然とした一般の人 (々)

不定詞の意味上の主語は、1)の主文の主語である名詞か、2)の不定詞の直前に位置する主文の目的語である名詞のどちらかであると考えるのがふつうである。不定詞の意味上の主語を最も明確に表すものは、3)の不定詞補文の標識「for」によって導かれる for 名詞 (句) あるいは of 名詞 (句) である。一見して、すぐに識別できそうだが、必ずしもそうではない。for の有無によって、意味上の主語と判断できる場合もあれば、そうでない場合もある。4)の文脈から理解できる場合や5)の一般の人々は特に誤解が生じることがなければ、不定詞の意味上の主語を明示する必要はない。しかし、for が明示されない場合、直前に位置する不定詞の意味上の主語は不定詞の意味上の目的語にもなり、不明確で曖昧な表現になる場合がある。次はその例である。

- (1) I have no friends to help.
- (2) a. I have no friends that I can help.  
b. =I have no friends that are in need of help.
- (3) a. I have no friends to help me.  
b. =I have no friends that can help me.  
c. =I have no friends that are helpful.
- (4) a. I have no friends to be helped.  
b. =I have no friends that need to be helped.  
c. =I have no friends that need some help.

(1)は to help の直前に位置する friends が、不定詞の意味上の主語にも目的語にもなることを示唆するための曖昧文で、二通りの解釈が可能である。(2)は「私が助けることのできる友達」で、目的格の関係代名詞に書き換えることができるということは、修飾されている friends は不定詞の意味上の目的語であり、主文の主語が意味上の主語になる。(3)は「私を助けてくれる友達」で、主格の関係代名詞に書き換えることができるのは、修飾されている friends は不定詞の意味上の主語である。(3a)の「私を助けてくれる友達」では、to help me の me が主文の主語と同じものをさす場合、削除することができるが、me を顕在させることで文の意味を明確にすることが可能である。(4)では、不定詞が他動詞で、不定詞の意味上の主語がその動作を受けることが明白な場合は、不定詞も受動態が使われ、「助けを必要とする友達」に明確に意味を限定することができる。この場合、不定詞の行為者、すなわち動作主は、主文の主語でも目的語でもなく、第三者の不特定な someone になる。このように、形容詞用法の不定詞に先行する名詞は不定詞の主語にも、目的語にもなることができる。

次は自動詞の不定詞では意味上の目的語は成立しないが、その意味上の主語が主文の主語である場合と、目的語である場合がある。

- (5) a. I told the boss to leave early today.  
 b. I asked the boss to leave early today.<sup>1)</sup>  
 c. =I asked for the boss to leave early today.<sup>2)</sup>  
 d. =I asked that the boss should leave early today.  
 e. =I asked the boss to let me leave early today.  
 f. =I asked the boss to be allowed to leave early today.  
 g. I asked the boss who to leave early today.  
 h. I asked to leave early today.

(5a)で使われている tell というタイプの動詞は、主文の目的語が不定詞の行為者であると考えられるので、不定詞の意味上の主語は、主文の told の目的語である boss である。一方、ask というタイプの動詞は、主文の主語が不定詞の行為者であるとふつう考えられるが、主文の目的語も不定詞の行為者になる可能性がある。従って、(5b)は意味上の主語が、主文の主語の I にも、また直前に位置する ask の目的語である boss にもなる曖昧文で、二通りの解釈が可能である。つまり、状況により、早退する人が、一人は「上司に」、もう一人は話し手である「私」になるのである。(5b)と(5c)のような不定詞では、主語の主観的判断が述べられ、boss が「早退した」のかどうかはわからない。むしろ「早退しなかった」と考えられる。(5b)では、ask の直接目的語である boss に直接声をかけて「今日上司に早退する」ことを勧めているが、(5c)では boss に直接ではなく、第三者を介して「今日上司に早退する」ことを勧めているという微妙なニュアンスを伴っている。日常の社会生活では「上司が早退する」ことより「私が早退する」ことをより優先的に考えるのがふつうだが、「上司が早退する」ことも容認されるべきである。(5d)の that 補文は、実際の行動に着手していることを表し、現実感がある。現実化された客観的な事実が表明されているので、「早退した」あるいはその強い示唆が見込まれる。しかし、その「早退する」という行為は、実際には boss の承諾が必要であり、同意を得ずに行動に出ることができないので、boss に「早退する」許可を求めなければならない。したがって、(5e)(5f)のように書き換えることができるのである。これにより、不定詞の意味上の主語がだれなのかを明確にすることができる。(5g)の「疑問詞+to 不定詞」では ask の意味は「頼む」ではなく「尋ねる」の意味に変わることには注意。(5h)は(5b)と違って、目的語が存在しない。同じような意味に思われるが、大きく異なる。(5h)は自分の行動に許可を強く求める表現で、意思がより直接的に明確に伝わるだろう。「早退させてほしいと頼んだ」という意味で、相手の領域に立ち入ることなく、自分の気持ちを表明して、実現の可能性を強く求めている。

(5b)は主語 + 動詞 + 目的語 + 補語という4つの要素が組み合わされた第五文型の構造を持ち、boss は to 不定詞の意味上の主語であると判断される。しかしながら、この

1) 友繁義典『ネイティブに感覚に近づく英語のニュアンス』（開拓社、2011）、65ページ。

2) これは「for + 目的格」不定詞補文と呼ばれている。このことについては第3章で詳しく述べている。

第五文型 (SVOC) では、両義性を説明することはできない。

次の文は、一見して(5)と同じような構造でありながら、両義的解釈を拒む、言い換えれば、対立的な領域から根源的な領域の固定的な解釈に戻ることを特徴付ける文であると言える。

(6) My mother asked a neighbor to take care of our cat during our absence.

(6)は(5)と同じ ask + 人 + to 不定詞という第五文型 (SVOC) の構造を持ち、a neighbor takes care of our cat during our absence という関係が成り立つので、to 不定詞は neighbor を説明している目的格補語であるといえる。My mother 自身の働きかけによって neighbor が影響を受け、「世話をする」という動作の対象である cat とその期間の absence が、2つ所有代名詞 our によって属性が特定されて、その意味の方向性が確実に狭まることになる。つまり、(6)は(5)と違って、その両義性を失い、不定詞の意味上の主語という根源的な基盤の領域に立ち戻ることになるのである。

次の文も不定詞補文が先行する名詞を修飾する形容詞的用法の例である。よく使われる正しい自然な表現なので、だれでも容易に理解できると思う。

(7) a. Please bring someone to fix my computer.

b. I have some questions to ask you.

c. I have a favor to ask of you.

=I have a favor to ask (of) you.

d. I have an important announcement to make.

(7)の形容詞的用法の不定詞補文とその不定詞に先行する名詞との間には、次のような関係を考えることができる。

(7') a. Please bring someone [for someone to fix my computer].

b. I have some questions [for me to ask you some questions].

c. I have a favor [for me to ask a favor of you].

d. I have an important announcement [for me to make an important announcement].

(7'a)では、先行する名詞が不定詞の意味上の主語に対応しており、(7'b)から(7'e)まではそれぞれ意味上の目的語に対応している。これらは不定詞が関係代名詞の働きをしている。

There 構文の there は、「存在」の意味を表す標識で、一般的に後に続く名詞が文の主語になる。この構文で使われる不定詞には、It is + 形容詞 + for ~ to 構文と同じように、動作の主体である for 名詞 (句) と共起する傾向が強い。不定詞は、先行する名詞にこれから起こる未来的な動作を付け加えるものだが、There 構文では「存在」の意味を表し、不定詞に先行する名詞は、ふつう事物・事柄を表すので、for 名詞 (句) で人が出現する可能性が高いと言わざるを得ない。

(8) a. There's nothing to worry about.

b. There's nothing for me to worry about.

- c. There's nothing for you to worry about.
- d. There's no need for anyone to worry.
- e. You have no need to worry.

(8a)のように、nothing は不定詞の前置詞の目的語であり、常に一般の人々を含意しているときは、意味上の主語の明示を避けるのが一般的である。(8b), (8c), (8d)では、「心配する必要はない」の意味上の主語が me にも you にもまた anyone にもなる。(8d)と(8e)では need は不定詞の目的語ではなく、to 不定詞が名詞を補足的に説明する同格関係(「～という」)にあり、従って、about は必要ではない。

上記の(7)(8)は不定詞の形容詞的用法と呼ばれ、この用法が成立するためには、不定詞と名詞が、主語と動詞、動詞と目的語、動詞+前置詞と目的語、不定詞が名詞の内容を補足的に説明する同格関係のいずれかでなければならない。不定詞が自動詞の場合、前置詞を後に添える必要がある。不定詞の意味上の主語が文の主語と同じで、その不定詞の示す行為を行う立場にあるときは、(8e)のように for 名詞(句)を明示することはできない。このように、不定詞は特定の主語との結びつきが不明確であるがゆえに、理解を難しくしていると言える。これは不定詞の特質の一つである。

不定詞にも能動態と受動態がある。不定詞が形容詞用法で名詞の後ろに置かれる場合は、その名詞が不定詞の意味上の主語にも目的語にもなり、能動態、受動態のどちらでもとることができる。to 不定詞の動詞が他動詞で、直前に位置する名詞(句)が不定詞の意味上の主語であって、文の主語以外の主体(動作主)によって、その動作を受ける立場が明白な場合は受動態が使われる。しかし、その動作主は by ... は明示されず、状況描写だけになる。

- (9) Hiroshima was the world's first city to be attacked with an atomic weapon.
- (10) Life is not a problem to be solved, but a reality to be experienced.
- (11) I'm told that in American job interviews, it's common for candidates to be asked where they see themselves in five years' time

不定詞に限らず、一般的に受動態よりも能動態のほうが好まれるが、不定詞の受動態の表現方法は、動作の主体ではなく、動作が及ぶ対象を主語にして、客観性のある著しくドライな印象を特徴づけるものである。つまり、不定詞の受動態の主語は例外的で稀有なニュアンスを有するものであり、または、身体的な被害や何らかの心理的影響を受けるものである。受動態は何か迷惑なことや嫌悪なネガティブな出来事を表現するのに使われて、人々の関心を誘い、注目を浴びることになる。不定詞の受動態も、特徴的な捉え方や関心の持ち方が反映され、視点の移転・話題・焦点・文脈を意識しながら、さらに話を進める大きなメリットがある。(9)では city, (10)では problem と reality, (11)では candidates が不定詞の意味上の主語である。

不定詞の形容詞用法で名詞の後に不定詞が置かれる場合、また、There 構文で不定詞の意味上の主語である for 名詞(句)が表現されない場合、There 構文の主語である名詞は不定詞の意味上の目的語にも主語にもなる。それゆえ、能動態、受動態のどちらにもなる

ことができる。そのとき、意味はあまり変わらない。しかし、次のように、nothing, something の後に不定詞が置かれる場合、能動態の不定詞と受動態の不定詞で意味が異なるので、注目すべきである。

- (12) a. There's nothing to do. (することが何もない)  
 b. =There's nothing that you should do.  
 c. There's nothing to be done. (手の施しようがない)  
 d. =There's nothing that is to be done.  
 e. =There's no way that can be done.
- (13) a. There is nothing to see. (見るべきものが何もない)  
 b. =There is nothing that you should see.  
 c. =There is nothing worth seeing.  
 d. There is nothing to be seen. (何も見えない)  
 e. =There is nothing that is to be seen.  
 f. =There is nothing at all that can be seen.
- (14) a. There is a lot to be said. (利点がある)  
 b. =There are a lot of advantages that deserve to be considered.

(12a)と(13a)は、nothing が不定詞の目的語になっているが、潜在する意味上の主語は漠然とした一般の人々である。(12c)と(13d)では、nothing が不定詞の意味上の主語になっており、その動作を受けることが明白なので、受動態になっているのである。(12a)には法助動詞 should が含まれ、「すべきことが何もない→することが何もない」と積極的に取り組もうとしない子供じみた怠慢な態度を示唆している。一方、(12c)には法助動詞 can が含まれ、「できることが何もない→どうすることもできない→手の施しようがない」と、どうすることもできない現実に翻弄されて、阻止したり、対処したりするための手立てや方法がまったく見当たらないという意味になる。(13a)も法助動詞 should が含まれ、「見るだけの価値がない→何も見るべきものがない」ことを意味して、おそらく無用な非難を避けるために、不快な悪意満ちた言葉と知りながら、明言することの煩わしさを避けた皮肉な嫌みのある言葉だといえる。また、(13d)も法助動詞 can が含まれて、「見ることのできるものがない→何も見えない」と視界不良の闇に包まれ、あかり一つ全く見えないことを表している。表面上には法助動詞は現れてはいないが、不定詞は、意味的に法助動詞を補って解釈されることになる。どのような法助動詞が補われるかで、微妙な気持ちや思いが伝わり、意味の違いが生じるのだ。その解決の糸口になるのが、不定詞の意味上の主語である。(12a)と(13a)は「人」が想起され、行為をする「人」に重点が置かれている。(12c)と(13d)は「もの・こと」が想起される。周囲の状況や文脈から行為者がだれであるか既にわかっている場合に、「見る」という行為そのものに重点が置かれる。(14)は批判的な言葉が思い浮かぶが、プラス面でもマイナス面でも擁護するもっともな理由がたくさんあるので、「利点がたくさんいえる→利点がたくさんある」という意味になる。不定詞は能動態でも受動態でも、あまり意味は変わらないが、形容詞的用法の不定詞には特別な

意味があり、理解し難いたいへん興味深い特徴の一つであると言える。

この形容詞的用法の不定詞には、法助動詞の can が含まれ、可能の意味を表している。can だけでなく、should, must, will, need to, have to など義務・責任・必要・予定などの意味を表すこともある。これは、to 不定詞が直前の名詞を後ろから修飾する形容詞的用法と呼ばれるものである。これらは、関係詞節・that 補文・時制・助動詞が欠落したものと考えると理解し易いかもしれない。

次の不定詞補文に先行する名詞が、場所・時・理由・方法であるとき、行為者である意味上の主語を明示する必要が多くなる。次の(15a)～(15e)の例は、不定詞が関係副詞節の働きをしていると考えることができる。

- (15) a. These children have no place to play (in).  
 b. Parks are also a place for children to learn and play together. According to one study, children learn better after they play in a park.  
 c. It's time for me to leave.  
 d. It's a very good reason for him to quit school.  
 e. Can you think of any way for me to conclude a sales contract?  
 f. I have no money to buy it (with).

不定詞補文に先行する名詞が place, time, reason, way, 加えて money であるとき、意味が明白な場合、通例前置詞は省略される。(15a)のように、「その場所で」ということが明らかであるからである。つまり、「場所」と「遊ぶ」という関連性で、「遊び場」という自然なつながりができるのである。前置詞が省略されると、place は play の主語でも目的語でもなくなり、ただ補足的に説明を加えるものになる。

次の文は授賞式での挨拶の言葉である。これまでの不定詞補文の意味上の主語についての考えをまとめるために、異なる表現方法によって想起されるイメージの考察であると言える。

- (16) a. It is a great honor to be a moderator.  
 b. It is a great honor for me to be a moderator.  
 c. It is my great honor to be a moderator.  
 d. I am greatly honored to be a moderator.

式典の挨拶の言葉でも、立場や状況によって表現の仕方はさまざまである。(16)では、それが言語の表現形式の違いとなって如実に反映されている。(16a)から(16c)は、形式主語〔虚辞〕の it が主語となっているが、(16d)は他の文と違って、一人称の I で始まっている。不定詞の意味上の主語に着目しながら、それぞれ詳しく考察する。

(16a)から(16c)では、形式主語が文頭にあり、不定詞補文の「司会を務める」という大役を担う人がだれなのか具体的に明示されていない。特に、(16a)の It is a great honor 「～できることは光栄の至りです」の表現では、文の主語も不定詞補文の意味上の主語も明らかにされていないので、心理的な側面が前面に押し出されて、相手との距離感や心理的な隔たりが生まれ、緊張感が出て、少し改まった謙虚な喜びが伝わってくる。授賞式での挨拶

拶では、個人を対象にした表現よりも、一般的な表現が好まれ、相手の自分に対する評価も一段と高まる。このように、動作主が非明示化されていればいるほど、思いがけない幸運に恵まれた喜びと、自分を応援してくれた人々への感謝の気持ちが自然にイメージされるのだ。

(16b)は(16a)に比べて、for me「私にとって」という言葉があることにより、丁寧で謙虚な響きがあるように思われるが、実際には、「私のために」「お願いだから」と解釈することもでき、真逆のニュアンスになることが多い。(16c)では、所有代名詞の my は、honor という名詞が備えている特質の経験者であることを示している。この honor は指示性が低いために、an honor と単独で用いることができるが、指示対象を特定する必要があるときは、my が重要な役割を担うことになる。my は「私が唯一光栄を経験しうる存在であり、その人物にふさわしいことが認定される」ということを示している。

最後に、(16d)では、I が主語になっているので、自分への評価に対して感謝の気持ちが前面に出ているのである。他の文に比べて、「私はたいへん光栄です」というニュアンスがさらに強まり、友人や家族や同僚ともに、喜びを分かち合いたいという一層親近感のある素直な表現になる。相手との距離を縮めて、周囲の人々の気持ちをほぐし、満面の笑みを込めて自分の気持ちを伝えることができる。自分自身に限定することにより、自ら受賞の価値や意義を感じながら、その瞬間に立ち会える大きな喜びと感謝が伝わってくる。英語では、遠回しな客観的な表現よりも、自分の気持ちを素直に伝えるほうが相手にうまく伝わる場合が多い。しかしながら、主語に I が使われると、自己中心的な発言にも聞こえ、いらぬ反感を招くこともある。(16)の意味上の主語は、すべて話し手である「私」である。文脈的判断によって、極めて常識的に自然に解釈される。

このように、不定詞の不明確な意味上の主語を自力で判断して、論理的意味を文脈から探り、文の含意を読み取りながら、主文と補文の極めて自然の文脈を設定して、不定詞の動作主がだれなのか、また、だれに何を言おうとしているのかをわずかな情報をもとに間髪を容れず理解する必要がある。不定詞では先行する名詞が必ずしも意味上の主語とならず、また、後方に続く名詞が必ずしも目的語になるとは限らないのである。たいていの場合、英語は語句の配置によってそれぞれの語がどのような役割をしているか理解できるのだが、不定詞は語順に関しては自由度が高く厄介であると言える。先行する不定詞の意味上の主語が、いくつもの組み合わせからなる句動詞の前置詞の目的語になる場合、その意味をつかむのは容易ではない。しかしながら、その反面、不定詞は狭い意味では時制を持たず、だれが行ったのかという情報を持たないので、使いやすいというメリットがある。しかし、これは状況を分析して、文脈をしっかりと考えなければ、正しい意味を捉えることはできないというデメリットにもなる。不定詞の動作の方向に着目しながら、広い視点で意味を捉えて、不明確な動作主を読み取りつつ、極めて自然に着実に読み進める必要がある。不定詞そのものには主格で表された主語を持つことはないが、不定詞の動詞には必ず動作を行う人が存在することを忘れてはならない。たいていの場合、不定詞補文の動作主である意味上の主語は、離れた位置にある主文の主語か不定詞の直前にある目的語である

が、断言できないさまざまな不明確な部分もある。

## 2. FOR 名詞（句）・代名詞と用法

それでは、for 名詞（句）・代名詞（これ以降は for 名詞（句）と表記）を検証する。to 不定詞は主文と補文をつなぐ標識になっているが、動詞は動作や状態を示す語であるので、その動作・状態の動作主、つまり主体が考えられる。これを不定詞の意味上の主語と呼び、意味上の主語を文の主語・目的語以外のものに明示したいときには、for 名詞（句）を不定詞の直前に置く必要がある。しかし、不定詞の意味上の主語は、本来主文の主語を基準として省略されることがほとんどである。ただし、省略することで、情報不足に陥って、意味が不明確になる恐れがある場合は、文の主語でもなく、目的語でもない特定の動作主、つまり、必要があれば for 名詞（句）を補わなければならない。このように、不定詞は他の文法事項に比べて、かなり自由度の高いものであると言わざるを得ない。加えて、for 名詞（句）は名詞的用法・形容詞的用法・副詞的用法のすべてに使用することができ、その使い方もいろいろである。

(17) For him to finish it in a day would be impossible.

(18) Is it possible for me to work from home?

(19) The semester system makes it easy for students to study abroad.

(20) It is for you to guess.<sup>3)</sup>

(21) He wants very much for me to leave.

(22) Could you tell me about some interesting places for us to visit?

(23) What will need to happen in order for robots to become our friends?

(24) a. I am happy for you to have succeeded.

b. =I am happy that you succeeded.

(17)から(21)までは名詞的用法である。(18)は文主語構文と呼ばれている。不定詞補文が主語の位置に置かれて、「頭でっかち」になり、文体が不安定になるので、形式主語の It を主語の位置に残して、不定詞補文を文末に移動している。(19)は不定詞補文が目的語になっているが、形式主語の it を置き、不定詞補文を文末に移動している。これは「頭でっかち」とか「バランス」という問題だけでなく、makes と easy の関係が希薄となって、意味が不明になる恐れがあるからである。(20)は、補語の位置に不定詞補文が置かれている。(21)は、動詞と目的語である名詞の間に副詞や形容詞が入りことにより、本来あるべき目的語の定位置に微妙な境界ができたために、目的語に対する直接的なつながりが弱まり、for を置かざるを得なくなったのである。(22)は、不定詞補文が直前の名詞を修飾している形容詞的用法である。後でさらに詳しく説明することにする。(23)は、in order to 「～するために」と副詞的な働きをしている。(24)は直前の形容詞を修飾する副詞的用法である。このように、すべての用法で for 名詞（句）を伴う不定詞補文が使用さ

3) 「当ててご覧」という意味。

れている。

### 3. 「FOR + 目的格」不定詞補文

明らかに不定詞の動作主が主文の目的語でありながら、アメリカ英語の一部の動詞は「for + 目的格」があえて用いられる傾向がある。本稿で一番述べたかったこと、伝えたかったことは、この「for + 目的格」不定詞補文である。驚くべきことは、目的語の位置にあるはずのない、また、あってはならない意味上の主語の標識が歴然と現れるという事実と、文法的にあまり触れられていないという2つの事実があることである。このような「for + 目的格」不定詞補文の傾向は、今後も増えるように思われる。これは意味が不明確になることを恐れて、意味上の主語である「for + 目的格 (人)」が主文の目的語に繰り上がりせずに、追加されているのではないか、という結論に至ったのである。「for + 目的格」不定詞補文の使い方と for の有無の違いについて、文法的特色と意味の性質について確認する。この文法的解釈について熟考を重ねて、「語順」という言葉の配置によって、説明できるかもしれない。具体例を見てみよう。

英語は「配置の言語」である。want to do の場合、特に必要とするものは、主語と「～をしたい」という行為だけである。しかし、相手に「～にしてもらいたい」ためには、for someone to do が正しく文の中で使われなくてはならない。この際、someone は主文の目的語に繰り上がる場合もあれば、繰り上がらない場合もある。その基礎的な考え方についてまとめておくことにする。

- 1) S + want + to do ...
- 2) S + want + someone + to do ...
- 3) S + want + 副詞 (句) + for + someone + to do ...

1)は、S want to do ... は、「～は～したいです」を表す。2)の S want someone to do ... は、「～は、人に～をしてもらいたい」を表す。3) want と someone の間に副詞句や形容詞で修飾されると、for + 目的格不定詞補文が埋め込まれる。

- (25) a. He wants me to leave.<sup>4)</sup>  
 b. \*He wants for me to leave.  
 c. He wants to be left by me.  
 d. He wants very much for me to leave.  
 e. \*He wants very much me to leave.  
 f. He very much wants me to leave.  
 g. He wants me to leave very much.  
 h. What he wants very much is for me to leave.

(25)の want のような動詞は願望行為を表して、「NP + to VP」の統語構造を持ち、不定詞補文では、未来に向かって意向・要求・要望を実現するように求める付加的情報が述

4) 「彼は私がいないうほうが良いと思っている」という意味。(ジーニアス英和辞典第4版)

べられている。He wants という主文に、for me to leave. の不定詞補文が埋め込まれて、不定詞の意味上の主語である me が主文の目的格に繰り上がっている。しかし、(25d)は主文と補文の間に介在する very much が主文の目的語の定位置に在るために、主文の動詞と目的語との結びつきが弱まり、意味をはっきりさせるために、意味上の主語の標識である for を補う必要があるのである。つまり、主文の主語は、(25a)と違って、第三者の存在を意識させ、不定詞の動作実現に直接自ら強く直接介入しないことを含意している。(25b)と(25e)は非文である。for の有無が大きく影響している。(25h)は「疑似分裂文」と呼ばれ、主文と不定詞補文の2つの部分に分割して、文末の要素、つまり不定詞補文に焦点を当てて、際立たせている。(25c)は、同じ意味に思われるが、意味が異なる。

アメリカ英語では、他動詞である主文の動詞に不定詞補文の意味上の主語、「for」が添えられるのは、非標準とされているが、日常的によく使われている。このように使われるのは、want という動詞だけではない。特に顕著なのは好悪を表す動詞、like, love, prefer, wish, hate である。

- (26) a. I'd like you to be very quiet today, boys and girls.  
 b. We'd like for you to consider donating something.  
 c. Chuck is about the same age as you, so I'd like you to get to know each other and for you to tell him about any unwritten rules he should know.
- (27) a. I would love for you to work with us.  
 b. =I would love you to work with us.
- (28) a. I prefer very much for John to come to the party.<sup>5)</sup>  
 b. I would prefer for you to play the piano.
- (29) "I wish for Daddy and my younger sister to be found as soon as possible," she said.
- (30) I hate for you to be disappointed.

誰かに依頼したり、要求したり、何かを願望したりするときには、友達や家族といった身近な人とのカジュアルな会話では want O to<sup>6)</sup> を使い、目上の人、初対面の人、ビジネスでの会話では、相手への気遣いから、丁寧な表現を必要するので、would like O to<sup>7)</sup>「～してほしいと思う」が使われる。熱意があることを強調したい場合には、would love O to「ぜひ～してほしいと思う」が使われる。そのほかに嫌悪を表す動詞には、would prefer O to do「～をしてもらいたい」も would hate O to do「～をしてほしくない」も、「for + 目的格 (人)」不定詞補文が埋め込まれて、for が挿入されることがある。

5) 影山太郎『日英対照動詞の意味と構文』(大修館書店, 2001年), 224ページ。

6) I want you to do は、「命令的な感じがする」「大人が子供に対して使う表現」などという意見がある。これよりも強い表現で、I need you to do. があるが、同じく、need for you to do のように、for が挿入される場合がある。

7) 「would like you to ~」を使うと少し丁寧になる。あくまで強制的な依頼のニュアンスがあるので、ビジネス上での依頼には使うことは避けた方が無難である。丁寧な表現は、Would you mind ~? あるいは I would be grateful if you could ~.

(26)の would like for O to も (27)の would love for O to も、「～(人)に～してもらいたい」という意味であるが、隣接する不定詞補文の意味上の主語が、主文の目的語に繰り上がることができる強い願望を表す動詞である。for は必要ないと思うが、for があっても間違っているというわけではない。この表現方法は、とても丁寧で控えめな表現に思われるが、(26a)に見られるように、場合によっては、命令口調になることもある。(26c)は長い例文であるが、would like O to の2つ構文が、接続詞 and によってつながれて、後の you には for が顕在している。これは主文の主語である I と would like you の位置があまりにも遠くかけ離れすぎると、意味が不明確になる恐れがあるためである。for 名詞(句)を明示することにより、不定詞の意味上の主語であることを明らかにすることができる。これにより、聞き手と読み手は混乱を回避することができるのである。一言で言うならば、「わかりやすさ」という配慮のためであると思う。しかし、(28)に見られるように、(26)(27)と同じ「～(人)に～してもらいたい」という意味になるが、very much の副詞で動詞が修飾されると、(25)と同様に、for は必要不可欠なものになる。(29)は、wish for O to do 「～が～することを願っている〔望んでいる〕」という非標準な米国語法である。(30)の hate for O to do は、「～(人)に～してほしい」という形も標準英語ではないが、O に修飾語句が伴う場合は、hate for O to do が一般化される。

for の有無によって、微妙な意味の違いが反映される。V + for O to は、書き言葉でも話し言葉でも使われ、どちらかというとな女性が好んで用いられる言葉である。特に、would love for O to が女性の間で多く用いられるが、男性が使ってはいけないということではない。非標準で古風な堅い表現で、for を追加することで目的語と不定詞補文が命令口調の押しつけではなく「あなた」が自らの判断で「～してもらいたい」、「～していただきたい」という穏やかな願いが込められて、話し手の主観的な直接的関与が緩和されて、その行為実現の可能性は間接的に聞き手に第三者を介して委ねられることになる。相手を気遣って、自分の意図することよりも、他人への敬意を尊重する表現になる。

(31) a. Mary is eager for you to come.<sup>8)</sup>

b. Mary is eager to come.

(32) a. She longs for you to come back.

b. She longs to come back.

c. \*She longs you to come back.

(31)の be eager for O to do は、「(人)が～するのを熱望している」という意味である。(32a)の long for O to do は「(人・こと)が～することを切望する」という「for + 目的格」不定詞補文であるが、(32c)のように、you を目的語の位置に繰り上げることはできない。(31b)も(32b)も主文の主語と不定詞補文が同じ場合は、省略することができる。

(33) a. Now I'm saying for you to sit down.

b. =Now I'm telling you to sit down.

8) 影山太郎『日英対照動詞の意味と構文』(大修館書店, 2001年), 216ページ。

- (34) a. I'm planning for him to go there.<sup>9)</sup>  
 b. I intend for him to help me with my homework.<sup>10)</sup>
- (35) a. I was waiting for you to say that.  
 b. Don't rush. You should wait for the light to turn green.  
 c. Customers are waiting in line for the store to open.  
 d. I had to wait around for the bank to open.
- (36) a. The doctor recommended for me to lose weight.  
 b. =The doctor recommended (that) I lose weight.
- (37) a. I didn't mean for you to go.  
 b. =I didn't mean that you should go.
- (38) The school system has had to arrange for many children to learn English as a second language.

(33a)は、口語英語では say for O to do が、tell O to do の代わりによく使われる。tell と同じように、命令を表す場合に用いられる。(34)は、plan for O to do 「(人)が～するように取り計らう」という意味である。また、(35)の wait for O to do 「(人・物・こと)が～するのを待つ」は、「for 人」だけでなく、「for 物」も不定詞の意味上の主語になり、wait for 「～を待つ」に比べてより具体的な表現になる。さらに wait と for を分離して、around や in line という副詞(句)を挿入して、待機する詳細な状況を伝えることができる。wait は文によっては、自動詞と他動詞の両方の役割があるが、他動詞として使用される例はわずかで、wait for として使われるのがふつうである。この場合、wait for だけを見ると、動詞に後続する前置詞があるので、自動詞である。しかし、文全体の意味を考慮すると、(35)の wait for O to do では、wait の動詞が表す動作の対象である目的語に間接的に影響を与える他動詞と考えられる。(36) recommend for O to と(37) mean for O to は、アメリカ英語では非標準とされている。that 補文を用いるのが一般的である。(37)は、忠告、場合によっては警告の意味を表している。(38)の arrange for O to で使われている動詞の arrange は、他動詞である。

このように、不定詞の動作主が主文の目的語でありながら、アメリカ英語では、非標準であっても「for + 目的格」があえて用いられる傾向がある。上の述べた動詞以外にも、「for + 目的格」不定詞補文をとる動詞がまだあるかもしれない。用法が拡大して、なじみのない動詞も使われるようになりうる事情がある。いずれにしても、文の構造を考える際には、ある動詞がどのような要素を必要とするかということをもっと知っておかなければならないということだろう。

すでに述べたように、英語は「配置の言語」である。時間の表現にも語順が決まっている。時を表す it を使った take という動詞も、次のように言葉が配置されている。ここで

9) 「彼にはそこに行ってもらつつもりです」という意味。(ジーニアス英和辞典第4版)

10) 「彼に宿題を手伝ってもらつつもりだ」という意味。(ジーニアス英和辞典第4版)

も不定詞補文の前に意味上の主語である「for + 目的格 (人)」が明示されている。

- 1) It takes + 人 + 時間 to do ...
- 2) It takes + 時間 + to do ...
- 3) It takes + 時間 + for + 人 + to do ...

take という動詞は二重目的をとる動詞で、一般的なふつうのありふれた表現では 1) が使われるが、3) のようにある特定の人物が長時間あるいは長期間にわたって、大きく関与した特異な表現には、語順が入れ替わり、言葉の配置が変わったことを示す for が必要になる。

- (39) a. It takes about ten minutes to go on foot to the station from my house.
- b. It takes me about ten minutes to go on foot to the station from my house.
- c. It takes about ten minutes for me to go on foot to the station from my house.
- d. How long did it take for you to come to this hotel today?
- e. I take about ten minutes to go on foot to the station from my house.
- f. It took many years for her to come to terms with her mother's death.
- g. But it took more than 40 years for the U.S. government to officially apologize for its action. In 1988, the United States passed a law admitting the injustice.
- h. However, it took a further 50 years for this disease to be properly named and recognized.
- i. It may take a few hours for the medicine to work its magic.
- j. Even if forests can recover, they do not do so quickly. It takes a long time for the environment to recover—for new trees to grow and for new species to return.
- k. I sometimes wish that it took longer for me to get to work. I find the train ride quite relaxing.
- l. One study that got a lot of attention when it came out a few years ago said it only takes 100 milliseconds, or one-tenth of a second, for a skilled HR practitioner to form a first impression.

(39a)では、ふつう人はだれでも「家から駅まで歩いて10分ほどかかる」ことを表現している。(39b)では、「私」自身に限定して、主観的な判断として「私は家から駅まで歩いて10分ほどかかる」ことを示している。さらに(39c)では、「私」という動作の主体と動作そのものを結びつけて一体化して、「あえて私が家から駅まで歩くには…」と新たな話題に焦点を当てて、歩行速度は人によって異なり、私自身はさらに時間がかかることを含意している。(39d)の疑問文では、明らかに明示する必要がないように思われるが、for 名詞(句)が使われている。「遠方からわざわざお越しいただいて」という感謝の言葉を暗示していると思われる。(39e)は「私」は意図的に10分ほど時間をかけて家から駅まで歩くことを表現している。旧情報になるので、「私が～」ではなく、「私は～」という意味になる。(39f)は不定詞の意味上の主語である for 名詞(句)によって、母親の死を受け入れて、悲

しみが癒されるのに、多くの時間を要したことが述べられている。(39g)は、米国の暗黒の歴史である日系米国人捕虜収容所の行為について、日米両国が和解し、わだかまりを解くのに長い歳月を要したことを述べるのに、for 名詞 (句) が使われている。(39h)はHIVが正式に病名が付けられて、認識されるようになるまで、さらに長く、50年を要したことが述べられている。(39i)は、薬の効き目が現れるまでに、長時間を要することが述べられている。この場合、for 名詞 (句) は物であって人ではない。(39j)は不定詞の意味上の主語であるfor 名詞 (句) が3つ、森の自然環境が回復すること、木々が新たに生えること、新しい種が戻ってくるのに、長い期間を要したことが述べられている。(39k)は、take long to 「～するのに長く (時間が) かかる」ことを意味する。(39l)は、これまでとは一転して、ベテランの人事担当者は面接の第一印象を形作るのに、10分の1秒という驚異的な時間の速さを強調するために、for 名詞 (句) が使われている。このようにfor 名詞 (句) を使って、言葉の配置のルールを破ることで、通常とは異なる、特異なるシグナルを表している。この場合、for 名詞 (句) に強勢を置いて読まれる。

#### 4. IT IS + 形容詞 + (FOR SOMEONE) TO DO ...

It is + 形容詞 + (for someone) to do の構文では、形式主語 [予備・仮主語・虚辞] と呼ばれる It を文頭に先立てて、be 動詞と難易・適否などを表す動作・行為そのものの評価を提示する形容詞で主文の述部を整え、It が指す具体的な評価の対象となる行為は後置されて、情報展開されている。これらの行為は思慮・選択・決心を経て、目的と動機は明らかで、自発的・意識的に行われた具体的な情報である。評価対象がだれかを明らかにしたい場合には、「for + 人」を to 不定詞の直前に置く。評価対象であるその人の性格・性質に深くかかわっていると思われる形容詞が用いられるときは、「of + 人」を同じく不定詞の直前に置く。「for + 人」はどちらかというとき明示されないほうが正則であるので、誤解を招くことがなければむやみに入れる必要はない。

- (40) It would be dangerous for us to go out late at night.
- (41) It is impossible for him to become a doctor.
- (42) Would it be possible for me to take a day off tomorrow?
- (43) It might be helpful for you to check the following sites.
- (44) While it is difficult for me to ask, I am writing to see if you have any available time to give me a little bit of help.

上の(40)から(44)の例は、文頭に後方照応的な形式主語の it を導入して、焦点となる重要な意味を持つ語句を後続させている。これまで it は、形式主語あるいは仮主語と言われているが、現在は there と同じく、意味を持たない虚辞とも呼ばれている。It は、何かについて突然何かについて話し始めるときに使用する構文である。従って、it そのものは文の焦点にも話題にもならない。まず先に、話し手の気持ちや意見を、主観的感情的判断を表す形容詞で伝えて、話し手の主張を和らげ、聞き手の衝撃を緩和して、話し手の本心に伝えたいことを後続の不定詞補文にシフトしているのである。従って、(42)は話し手

に直接話しかけるのではなく、物事の遠回しな客観的な感想になって、心理的なへだたりができて、丁寧な依頼表現の中でも最も丁寧な表現と言われている

It is + 形容詞 + to 名詞 (句) の後に to 不定詞が使われるようになり、その to 名詞 (句) が意味上の主語を表すことが重なって、to 名詞 (句) に代わって for 名詞 (句) が意味上の主語として使われるようになったと言われている。名詞の与格を to で表現するようになったので、「～にとって」と訳すようになったのである。しかし、使われる文の形容詞・項・不定詞の種類によっては、時には、「～が」と訳す場合もある。つまり、「～が」は人 (物・こと) がある目的に到達するために、動作や行動するときに使われ、「～にとっては」は人 (物・こと) に動作や行動が直接影響するとき用いられる。不定詞補文に現れる to は同じ前置詞の「到達点」を表し、一方、for は前置詞 to の「方向・方角」が to 不定詞で使われる場合の元になっている。つまり、to は動詞が表す行為の「到達点」であり、for は動詞が示す何らかの意図・影響が向けられる対象者として捉えられている。

興味深いことに、この構文は「～が～することは～だ」と説明されているものもあれば、「～することは～にとって～だ」となっているものもある。これは「for + 人」には2つの役割があるからである。一つは不定詞補文の意味上の主語であり、もう一つは判断の形容詞で表される対象者である。

1) It is + 形容詞 | for + 名詞 (句) + 不定詞補文

2) It is + 形容詞 + for + 名詞 (句) | 不定詞補文

1) では、for + 名詞 (句) + 不定詞補文がひとまとまりの部分構成している。この場合、for + 名詞 (句) が不定詞の意味上の主語になっている。一方、2) では、It is + 形容詞 + for 名詞 (句) でひとまとまりを構成して、それに不定詞補文が付け加えられている。このような理由から、二通りの解釈が可能なのである。言い換えると、不定詞の意味上の主語が不定詞と結びつきが強く、一体感があって、意味上の主語に重点が置かれている場合は「～が～する」と解釈して、意味上の主語とその不定詞が懸け離れたものであると認識され、for 名詞 (句) が判断を表す形容詞の論拠となる対象者である場合は、「～には、～にとって」と考えるほうが望ましいと思われる。あまり深く考慮せずに、to 不定詞の前の位置関係から不定詞の意味上の主語だと判断して、「～が」と一目散に飛びつくのはお勧めできない。しかし、どちらかという日本語は主語を表現しない言語なので、あえて日本語訳にはしないほうが賢明な場合もある。(45)と(46)の for 名詞 (句) は「～にとって」という例文である。(47)と(48)は for 名詞 (句) が2つ並んでいる。前者は評価の対象者である。後者は不定詞の意味上の主語になっている。

(45) I think it's important for children to be able to answer family budget question.

(46) It is a source of deep regret for me to learn that your dear son passed away suddenly.<sup>11)</sup>

11) to do that S + V の形式で see, know, note, hear, learn などの知覚・認識を表す動詞が多く使われる。

(47) It is important for me for you to visit my mother.

(48) It would be tough for John for his wife to accept this view.

さらに詳しく次の考察を続ける。

(49) a. It may be difficult for you to solve this problem.

b. This problem may be difficult for you to solve.

c. \*You may be difficult to solve this problem.

d. \*It may be difficult that you solve this problem.<sup>12)</sup>

e. For you, it may be difficult to solve this problem.

f. This problem may be too difficult for you to solve.<sup>13)</sup>

g. This problem may be too difficult for the ten-year-old boy to solve (it).

h. Those problems are difficult enough for the university students to solve (them).

i. This problem may be so difficult that you cannot solve it.

(49b)に見られるように、話し手の主観的判断の形容詞である difficult は、不定詞補文の目的語を主文の主語の位置に繰り上げることは可能である。しかし、(49c)のように、補文の for 名詞(句)を主文の主語の位置に繰り上げることはできない。これは、difficult が人の性格を表す形容詞ではないからである。また、この形容詞の種類は、(49d)のように、It ~ that の構文に置き換えることはできない。このことについては、次の段落で詳しく説明している。(49e)の例文では、主文の主語を越えて、for 名詞(句)を文頭に移動させている。これは「前置」と呼ばれ、不定詞補文を際立たせて、そこに焦点を当てる目的で行われている。この場合、意味はもはや「～が」ではなく「～にとって」という意味になる。for 名詞(句)と述語がこれほど離れると当然のことかもしれない。このように、不定詞補文にある主語・動詞・目的語の位置関係を壊して、主文の主語や目的語の位置に移動させることができる。他の補文、例えば、that 補文や動名詞補文では、分離することはできない。(49f)は、不定詞の意味上の主語である for 名詞(句)があつて、主文の主語が不定詞補文の事実上の目的語を表すものであるとき、しかも、その主語と to 不定詞の目的語の位置が接近して、その主文と不定詞補文との隔たりが少なく、指示している内容が明白な場合は、削除される。(49g)では不定詞の意味上の主語がさらに長くなり、不定詞の目的語との間隔はますます広がって、意味が不明瞭になる恐れがあるので代名詞が挿入される。これらはいずれも随意である。(49i)では、ご存知の通り、that 以下の文では it は必要である。結局、目的語の有無は、文の形式に左右されるだけでなく、心理的な不明確な特徴を備えていると結論付けることができる。

It is + 形容詞 + (for someone) to do の構文で用いられる形容詞は、その意味の特徴がそのまま統語構造に反映される。つまり、この構文で用いられる形容詞の種類によって、

12) easy, difficult の場合、that 節は不可。そのほかに次のような形容詞がある。hard, tough, dangerous, safe, good, bad, usual, unusual, useful, useless などがある。

13) for を伴うときは、it は削除されない場合がある。

It is + 形容詞 + for ~ to の形式をとるものと、It is + 形容詞 + that + S + V をとるものと、It is + 形容詞 + for ~ to と It is + 形容詞 + that + S + V の両方をとるものの3つに分類することができる。難易形容詞の場合、It is + 形容詞 + for ~ to の形式のみが用いられて、不定詞の自発的な行為そのものに対する判断に重点が置かれて、for 名詞(句)は動作主ではなく、行為の難易の判定を受ける対象者として捉えられている。

次に性質を表す形容詞が It is + 形容詞 + 「of + 名詞(句)」不定詞補文で使われる例について検討する。

(50) a. It was wise of you to refuse his offer.

b. You were wise to refuse his offer.

(51) You're already 28, Kathy. Isn't it wiser for you to seek a marriage partner instead of getting another job?

It is + 形容詞 + 不定詞補文で、人の性質・判断・評価を表す形容詞が使われている場合は、不定の意味上の主語に for 名詞(句)ではなく、of 名詞(句)が使われる。nice, kind, honest, right, rude, silly, stupid, wise などがその形容詞である。しかしながら、この構文で人の性質や評価を表す形容詞が使われていれば、必ず of と共起するというわけではない。(50a)に見られるように、wise の形容詞の場合は of が使われて、さらに(50b)では、不定詞補文の目的語ではなく、不定詞補文の主語が主文の主語の位置に繰り上がっている。It was wise of you がひとまとまりの構成素をなしているからである。しかしながら、(51)では同じ wise の形容詞であっても、for が使われている。不定詞補文の意味内容が人の性質とはかけ離れたものである場合は、of ではなく for が使われる。「再就職ではなく、結婚相手を探す」という評価の対象となる行為が、一般的に人物の評価として判断の根拠としてふさわしいものではないからである。当然のことながら、you を繰り上げることはできない。このように、(51)の例に見られるように、人の性質は恒常的に内在する性格的特徴を指すので、いかなる場合も不定詞補文の人の行動や動作はその人の性質に多少であってもかかわり続けて、反映されるものである。しかし、そうとは言い切れない場合がある。具現化された行為から、その人物の評価を考えることが、論理的にスムーズに流れる場合がある。性格に重点が置かれている of は、for に比べてどちらかという減少傾向にある。

## 5. IT IS + 形容詞以外のもの + (FOR SOMEONE) TO DO ...

次の例に見られるように、It is + 形容詞 + (for someone) to do の構文は形容詞以外のものでも同じように表現できる。しかし、やや不自然な響きがあるが、これらの名詞は形容詞のようなイメージを含んでいる。いずれも文の主語が It で始まり、客観的な感想が述べられて、不定詞の意味上の主語は後置されるのが基本的パターンである。

(52) It is fun for me to take pictures.

It is great fun for me to take pictures.

It is more fun for me to take pictures.

- (53) I think it a pity for you to lose such a chance.  
 (54) It's a shame for a child to stay indoors on a nice day.  
 (55) a. It's time to go to bed.<sup>14)</sup>  
       b. It's time (for me) to go to bed.  
       c. It is a right time for her to start taking piano lessons.  
       d. It is clearly time for him to think again.  
       e. It's time (that) you went to bed.  
       f. It's high time you went to bed.  
 (56) It is a good thing for an uneducated man to read books of quotations.  
 (57) It's good practice for her to explain things in English.  
 (58) He really liked his job. So it was a real shock for him to suddenly find that he was no longer in demand.  
 (59) a. It used to be banned for the Maori to use their language.  
       b. =The Maori used to be banned from using their language.  
 (60) It is no trouble to[for] me to do this.

(52)の *fun* は形容詞のように思われるが、名詞である。(53)の *pity* の基本的用法は *It is a pity that ~* という構文であるが、*It is a pity for ~ to* の不定詞補文でも使用できる。(54)の *It is a shame* を使った名詞表現でも、(53)と同じような形式で用いることができる。これらの不定詞補文は事実性が高く、現実に関わりそうなことを表すので、*that* 補文に置き換えることができるのである。(55a)の不定詞補文も(55e)の *that* 補文も「もう寝る時間です」の意味であるが、少しニュアンスが異なる。(55a)の *It's time ~* は、*to* 不定詞の重要なポイントである「今から~する」という未来志向の意味を含み、話者の視点を含まずに単に事実をありのままに述べる直接法の「だれだれが~する時間だ」と言って、相手だけでなく、自分に対しても動作や行動を促す意味になる。状況としては、ぐずぐずして、もどかしい相手にいら立ちを募らせて、ぶっきらぼうに言う場合によく使われる。とにかく相手はまだ寝る意思がなかったり、寝るのをためらったり、まだ寝るという行為がまったく見られない段階で、寝ることを促す表現である。母親が自分の子供に対する叱責の言葉になる。(55b)のように意味上の主語の *for me* が省略されると、聞き手に向けられた言葉だと誤解されて、子供っぽい扱いを受けたことへの感情的なわだかまりが生まれて、意図せずに相手を傷つけたり、怒らせたりする危険性がある。たとえ相手の健康面を慮ってのことであっても、いらぬ反感や反抗が危惧される場合もある。一方、(55e)(55f)では *that* 補文が使われ、現実的に見れば「もう寝る時間だ(なのにまだ寝てない、もう寝てもいい頃だろう)」という現実と反する仮定法過去の意味合いが含まれているので、事実とは異なる想定を表すものである。従って、「まだ寝ていない。早くしなさい」と相手に対

14) 話し手自身の視点から見ると、「寝なくちゃ」「寝なきゃ」「寝ないと」という意味にもなる。時間が切迫した状況に応じて使い分ける必要がある。

して不平・不満・いら立ちを表すことになる。どちらかと言うと、仮定法過去は、焦る心を抑えた表現になるが、両方とも現実的事象がいまだ存在していないことを表している。つまり、「まだ寝ていない」という「非現実感」, 「距離感」, 「焦燥感」があることである。いずれにしても、that 補文の内容は、だれの目にも、依然事実だと見なされているということは何ら変わらない。(59)の banned は「禁止されて」という意味であるが、形容詞の意味になる。(60)では本来の意味が希薄になって、ほとんど区別なく使われている。

この構文で使用される名詞は、形容詞から派生された fun や time (～に適した時) のような1語からなるものもあるが、「冠詞+形容詞+名詞」の3語から成り立っているものが多い。3語以上の語句が使われると、本来の形式主語の It を文頭に使用した意味がなく、3語を超えないようにすることが大切である。形容詞単独ではなく、a + 形容詞 + 名詞が使われると、不自然な響きがあるということは否めない。しかし、(52), (55), (56)～(58)のように、一般的な名詞の概念に繊細な形容詞を付け加えて、内包的な意味の範囲を広げることによって、名詞または形容詞だけで表すことのできない新しい含みを持たせることができるので便利である。先に、自分の意見や感情や状況を相手に伝えることで、内容がわかりやすくなる。会話文ではよく用いられるが、不定詞の意味上の主語である for 名詞(句)を入れることで、聞き手に対してすこしインパクトが強くなり、語気が荒くなる。

不定詞補文には、顕在であれ潜在であれ、いかなる形であっても必ず「意味上の主語」が存在する。文の主語は原則として文頭に現れ、動詞のあとにはさらに目的語が後続する。目的語は直前にある動詞の動作が向けられる対象となる人や物を表して、受動態では主語になることができ、代名詞の場合は目的格になる。主語・動詞・目的語の自然なつながりが、最も使用頻度が高く、英語本来の大原則であると考えて、「for 名詞(句)」不定詞補文をすべて網羅するような枠組みを提示すると、次のように分類することができる。

- 1) For S' to V' O' + V (be verb) + Adj [NP, Adv.]
- 2) S V (be verb) + for S' to V' O'
- 3) S V + (for S') to V' O'
- 4) S V O + for S' to V' O'
- 5) It is Adj. + for S' to V' O'
- 6) S V it + Adj. + for S' to V' O'
- 7) NP + for S' to V' O'
- 8) S V (be verb) + Adj. + for S' to V' O'
- 9) S V + Adv. + for S' to V' O'

不定詞補文は for 名詞(句)で導入されるが、漠然とした一般の人々、文脈から判断できるもの、すでに、主文で述べられていて、誤解が生じる恐れのないものは削除され、欠落する。従って、不定詞補文には主語が現れず、目的語も見当たらず、だれが行ったのか、だれに行われたのか、実際に行われたのか、いつ行われたのか、はっきりとした明確なイメージを描くことのできない漠然とした現実感の乏しい表現方法なのである。

## 終わりに

不定詞は、不定詞補文の中で to 不定詞として動詞の機能の有しているが、全体としては、名詞的用法・形容詞的用法・副詞的用法として機能し、名詞・形容詞・副詞としての役割を果たしている。名詞は文の主語・目的語・補語になり、「～すること」を意味する。形容詞は名詞を修飾するが、不定詞とそれを修飾する名詞の意味的な関係は「～のための」「～すべき」などの法助動詞の意味以外にさまざまな統語上の関係がある。副詞は「～するために」「～して」「～ならば」「(…して) ～になる」「～するとは」「～するのに」などさまざまな意味があり、その意味を思い出しながら、訳し方を使い分けている。時には、その微妙なニュアンスがつかめず、戸惑うときもある。さらに困惑することは、明確に断言できない曖昧な場合が多い。

to 不定詞には、一見易しそうに見えるが、文法的にも、意味的にもたいへん難しいものがある。しかしながら、to 不定詞も前置詞 to と同じ「方向・到達点」を表している。不定詞補文の先頭にある to は、主文と不定詞補文をつなぎ、文を一つに結びつけている。このとき、文中のいろいろな要素によってさまざまなイメージが浮かび上がる。これは、ネイティブにとっては、単純なイメージを紡ぐ作業かもしれないが、先頭に立って不定詞補文を導く to は、不明確なイメージを持つ接続詞のような役割を果たしている。それは動作が「～の方向に到達する」というイメージである。このイメージを習得すれば、不定詞の文法事項の習得が容易になり、感覚的に瞬時に使いこなすことができるように思われる。

不定詞の英語教育の問題点は、to 不定詞がその働きに応じて名詞的用法・形容詞的用法・副詞的用法と分類して、その文脈に応じて、多様な意味を割り当て使い分けてきたのである。その用法や意味が極めて判別が難しいものがあり、行き過ぎた点があるように思われる。さらに、動詞があれば必ず動作主がある。動作が及ぶ対象もある。これらは、文が成立するためには最小限必要なものである。意味だけでなく、それが文法上どのような役割を果たしているかを理解する必要がある。

不定詞補文の形式は、主文にある主語、動詞、形容詞、目的語の性質や特徴によって決定され、不定詞の意味上の主語を最も強く決定づけるのは、先行する主文の主語・目的語の名詞に限定されると言っても過言ではない。それらの名詞に対応する行為者と対象、話し手と聞き手、当事者と第三者などの役割概念を明確にししながら、不定詞の直接的な動作対象はだれなのか、その行動はだれに何の目的で向けられているのかを考えなければならない。そのほとんどはたいてい照応関係によって文脈から自然に解決されるものである。しかし、母国語話者でない私たちは意識的に配慮をしなければならない。その文に登場する役割が多ければ多いほど、必ず何らかの特徴的な複雑さ、曖昧さが生じて、不明瞭な場面に遭遇することが多くなる。それゆえ、不明瞭な意味を補うために、不定詞の意味上の主語である for 名詞（句）がオプションで必要になってくる。

(61) The mother continues to hunt to get soft things for her child to eat.

(62) The growing problem of student debt is making it harder for people to buy a home, start a family and save money for their retirement.

(61)では、実はこの母親とは中型の海棲哺乳動物、ラッコの母親のことである。for her child がなければ、母親が自ら高齢か病気のためにやわらかい食べ物を捕獲していることになる。(62)では、一般人称の people が使われている。不定詞の意味上の主語には、一般人称も使われる。もし people がなければ、意味上の主語の判読が難しくなる。for 名詞(句)は文の意味を明確にするために、また、誤解を避けるために for 名詞(句)を to 不定詞に前置きする必要がある。

for 名詞(句)が現れるその最も典型的なものが、It is + 形容詞 + (for someone) to do ... の構文である。この構文は、「ある人や物がある状態や状況にあること、人のある特定の行為が話し手の主観的・感情的判断につながる」という一般論になる。この表現は話し手が自分または聞き手の実体験をもとにあくまで一般論として表現しているのである。一般論の体裁を取るのも、必然的にこのような非人称で始まる第三者的な視点から、断定的な表現を忌避しようとする表現になる。

不定詞の特徴的な捉え方や関心の持ち方が不定詞の理解に大きく影響する。まず、不定詞では「人」を表す主語がはっきりと明示されていない。「人」を表す事柄が特別な扱いを受けていて、to 不定詞は意味上の主語を持たず、動詞の意味を表すだけで、また、不定詞の目的語である「人」も主文の主語あるいは目的語に繰り上がる場合があり、はっきりと容易に特定することができない。だれがだれに何を行ったのかははっきりとイメージを描くことができなければ、おおまかな全体のイメージすら把握することは困難である。未来のいつに行うのか、その実現可能性の成否の顛末はどうなるのか不明確な部分が多く、この不定詞の特徴的な複雑な曖昧さへの衝突が学習の進路を阻むケースがほとんどである。

この解決の糸口になるものは何かといえば、それは「人」である。具体的に言えば、不定詞に伴う特徴的な複雑さ曖昧さは、明快に一言で捉えられるものではない。大切なことは、人間の立場からすると、だれでも容易に理解できるはずである。不定詞の動詞の意味とその不定詞の意味上の主語「人」と意味上の目的語「人」を最優先させることによって、動詞の意味と不定詞が持つ構文上の意味を考慮しながら、欠落した部分を紐解き、より自然な意味の解釈に結びつけることが必要である。

#### 参考文献

- 安藤貞雄 (2008) 『英語の文型』 開拓社, 東京  
 稲田俊明 (1989) 『補文の構造』 大修館書店, 東京  
 小野隆啓 (2015) 『英語の素朴な疑問から本質へ—文法を作る文法—』 開拓社, 東京  
 影山太郎 (2001) 『日英対照 動詞の意味と構文』 大修館, 東京  
 栗原和生 (2001) 『補文構造』 研究社出版, 東京  
 友繁義典 (2011) 『ネイティブに感覚に近づく英語のニュアンス』 開拓社, 東京  
 豊永彰 (2009) 『英文法ビフォーアフター』 南雲堂, 東京  
 中島平三 (2006) 『スタンダード英文法』 大修館書店, 東京

- 早瀬尚子 (2002) 『英語構文のカテゴリー形成』 勁草書房, 東京
- 古田直肇 (2015) 『英文法は役に立つ! —英語をもっと深く知りたい人のために—』 春風社, 横浜
- 保坂道雄 (2014) 『文法化する英語』 開拓社, 東京
- 山岡洋 (2014) 『新英文法概説』 開拓社, 東京